



傾聴ボランティアの臨床心理学的意義とその養成 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	目黒 達哉
発行年	2018-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第684号
URL	http://hdl.handle.net/10112/13395

[25]

氏名	目黒 達哉
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第 26 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	傾聴ボランティアの臨床心理学的意義とその養成
論文審査委員	主査 教授 串崎 真志 副査 教授 中田 行重 副査 教授 池見 陽

論文内容の要旨

地域社会には支援を必要としている人々があり、さまざまな支援がある。例えば、高齢化社会における高齢者支援、児童虐待における子育て支援、震災・災害現場における被害者支援、教育現場におけるいじめ・不登校・発達障害の支援などである。こうした状況の中、臨床心理士などの専門家による伝統的な心理療法的関わりだけでなく、専門家がボランティアと協働・連携した支援のあり方が求められている。

本研究では、傾聴ボランティアの養成と実践を対象に、ボランティアする・されるという相互性に注目しつつ、その臨床心理学的意義を考察した。傾聴ボランティアはアメリカに始まり、日本においても行政機関等で養成されている。傾聴ボランティア自身は、どのように傾聴能力を高め、どのような自己成長を感じているのだろうか。またそれは、コミュニティ感覚をどう変化させるのか。また、臨床心理的地域「援助」という視点に加えて、臨床心理的地域「形成」という観点から、地域社会を支えていた人々が、いずれ高齢者となり支えられるという、相互性の連鎖をふまえて、傾聴ボランティアの養成と実践の意義を考察した。

本論文は 6 章からなっている。まず、第 1 章で研究の背景と目的を述べた。続いて、第 2 章で事例を紹介し、第 3 章で傾聴ボランティアの養成プログラムを概観した。そして、第 4 章で傾聴ボランティアに対する自由記述と半構造化面接、第 5 章で傾聴練習をしている大学生に対する質問紙調査の結果を報告し、第 6 章で総合考察を行った。要旨は、以下の通りである。

第 1 章では、傾聴ボランティアとその養成の基盤となっている臨床心理的地域援助論とボランティア論を概観し、本研究の目的と意義について述べた。第 1 節では、臨床心理的地域援助が臨床心理査定技法、臨床心理面接技法を包含しつつ、地域住民やボランティアとの協力・連携を図りながら、クライアントの取り巻く家族・集団・組織・地域社会といった環境に働きかけて、クライアントの心の問題解決や成長・発展を促すことを述べた。第 2 節では、傾聴ボランティアを、カウンセリングにおける傾聴とボランティアの合併と

捉え、「動機」「人間関係」「コミュニケーション」「傾聴」「受容」「共感」「守秘義務」という共通性をもつことを述べた。

第2章では、不登校の生徒に対する臨床心理的地域援助の事例を取り上げた。第1節で事例の概要を説明し、第2節で臨床心理士、学生ボランティア、社会人ボランティアの支えによって成長し、今度は自分自身がボランティアとなって人々を支えるようになったという変化について考察した。第3節では、「支える人と支えられる人が交替しうる可能性」を相互性と定義し、哲学、社会学、比較行動学、看護学における相互性を概観した。臨床心理的地域援助においては、「ボランティアすること・ボランティアされること」という関係性、そして支える人が支えられるようになるといった時系列的な連鎖が基盤になり、共生社会を形成すると考えられた。

第3章では、傾聴ボランティアの養成の実際について述べた。第1節では傾聴ボランティア養成の歴史を概観した。第2節では、著者が関与している行政機関における養成講座の受講者・行政機関の担当者・実習施設に聞き取り調査を実施し、受講者の多様なニーズを確認した。さらに第3節では、著者の勤務する大学における認定傾聴士の養成カリキュラムを概説し、その社会的意義と今後の課題について考察した。認定傾聴士は、学内だけの活動で構築できたわけではなく、実習機関の担当職員や高齢者、地域の老人クラブ、すでに活躍している傾聴ボランティアなど、多くの力によって支えられていた。

第4章では、傾聴ボランティアが高めるべき傾聴の技能、自己成長、コミュニティ感覚について検討した。第1節では、行政機関における傾聴ボランティア養成講座の受講者45名を対象に、傾聴感覚（「傾聴できた」と感じる場面）について、自由記述による調査を実施した。KJ法によって整理した結果、受講者のなかには、「相手の心に耳を傾けること」「共感すること」というように、単に聴くだけではなく、もう一步深まった体験をしている人があった。そこで第2節では、傾聴ボランティア自身がどのように自己成長を遂げているかを質的に検討した。高齢者の傾聴ボランティア経験者7名を対象に、自由記述と半構造化面接を実施した。KJ法によって整理した結果、傾聴ボランティア経験の語りは、【外的成長】【内的成長】という2つの大カテゴリー、[I. コミュニティ意識の高揚][II. 人間関係の豊かさ][III. 傾聴スキルの向上][IV. 傾聴の深化][V. 自己の変化][VI. 精神的豊かさ]という6つの中カテゴリー、そして14の小カテゴリーで構成された。この結果は、高齢者においてもスキルの向上が重要であると同時に、謙虚さや生きがいを感じつつ、自己の課題を見つめるといった精神性にも価値が置かれていることを示していた。また、傾聴ボランティア経験が、自分自身の振り返りに役立っており、ボランティア自身の人間関係を見直す機会になっていることも指摘できた。

第5章第1節では、コミュニティ感覚の研究動向について概観した。コミュニティ感覚は、メンバーシップ (membership)、影響力 (influence)、統合とニーズの充足 (integration and fulfillment of needs)、情緒的結合の共有 (shared emotional connection) という4因子からなる (McMillan & Chavis, 1986)。第2節では、講義・実習における傾聴練習が、コミュニティに対する態度をどう変えるかを検討した。社会福祉学部の大学生89名を対象に、地域コミュニティに対する態度尺度 (福島・鶴養, 2013)、現住所の居住期間、居住形態、人生に対する満足尺度 (角野, 1994) を実施した。パス解析の結果、傾聴練習が地域への愛着を増加させるという直接効果がみられた。一方、仮説に反して、傾聴練習が人生満足感を

経て地域コミュニティに対する態度をごくわずかに減少させるという間接効果もみられた。その理由として、彼らは実際の傾聴ボランティア活動を通して、地域の課題を肌で感じ、「私が満足するだけでいいのだろうか」という疑問に直面した可能性が示唆された。

第6章では、総合考察を行った。第1節で本研究における傾聴の立場を明確にし、第2節では、傾聴する側と傾聴される側が、共感的な関係を通して、実際に影響し合うことを述べた。また、傾聴ボランティア自身が、自己成長（傾聴スキルと精神性のバランスの良さ、傾聴スキルの高い習熟と語り手への深い理解、日常生活の人間関係の見直し等の特徴）とコミュニティ感覚（地域への愛着）を持ち合わせることで、支える人と支えられる人が入れ替わる時系列的な連鎖がスムーズに継続され、共生社会につながることを、臨床心理的地域「形成」と呼んだ。第3節では、傾聴ボランティアの新たな展開として、著者が関わっている社会福祉協議会の「あんしん電話」「ふれあいサロン」という活動を紹介した。これらがうつ病や自殺や認知症の予防に役立ち、精神的に豊かな地域につながることを期待して締めくくりとした。

論文審査結果の要旨

本論文の特徴は、(1) 傾聴ボランティアという非専門家による地域活動が、臨床心理的地域援助としても意義があることを示した点、(2) 傾聴ボランティアに対する半構造化面接を実施し、傾聴ボランティア自身が自己成長する可能性を示唆した点にある。(3) また、著者自身が臨床心理士として、傾聴ボランティアを養成する経験を踏まえた、地域形成に関する研究であり、実践的・臨床的・社会的な価値が大きいことも特筆できる。

以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準（課程博士）に従って、審査委員の見解を述べる。

1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

傾聴ボランティア養成についての臨床心理学的意義と、地域援助の社会的意義を検証するという問題意識が明確である。本論文では、臨床心理的地域援助やコミュニティ心理学、臨床事例の考察をもとに、「支える人と支えられる人が交替しうる可能性」（相互性）という概念を設定し、著者自身の傾聴ボランティア養成経験（実際の行動学）を踏まえて、臨床心理的地域「形成」の道筋を示すなど、適切な順序で課題を設定している。

2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

臨床心理的地域援助やコミュニティ心理学の国内外の先行研究を幅広く読み込んでおり、深い知見をもっている点を評価できる。口頭試問では、傾聴そのもの（傾聴とはどういうことか）について、もう少し踏み込んだ議論が必要という指摘があった。

3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

全体として、研究目的に照らして概ね適切な研究計画で実施・分析しており、特に事例

研究の記述は優れていて、説得力があった。一方、口頭試問では、主要な成果である第4章の対象者が少ない点や、第6章の臨床心理的地域形成と冒頭の実際の行動学の対応について質疑がなされた。

4. 論文構成が的確で、論理展開に整合性、一貫性、説得力があること

論文構成は全体としての的確で、適切な順序で研究を積み重ねており、論理展開も概ね整合的といえる。ただし、支える人と支えられる人が入れ替わる可能性（相互性）が、どのように地域形成に結びつくのかについては、ややわかりにくいとの指摘があった。

5. 全体を通して学術的な独創性が認められること

本論文は、傾聴ボランティアという非専門家による実践を、臨床心理的地域援助やコミュニティ心理学の枠組みから考察し、質的・量的方法によって明らかにしようとしている点で、学術性と独創性を有すると評価できる。

6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

傾聴ボランティアは、精神的に豊かな地域の形成に、大きく貢献する活動といえる。本論文は、臨床的な問題意識と実践を背景にもち、相互性をもった地域形成というキーワードを提案している。これは、臨床心理的地域援助やコミュニティ心理学において、今後の発展の基礎になると評価できる。

以上のように、一部に問題点もみられるが、これらの指摘は本論文の価値を低くするものではない。臨床心理的地域援助やコミュニティ心理学的の枠組みによってボランティア研究に新しい知見をもたらし、実践への示唆を得たことは、博士論文審査基準からみて適切だと判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。